

2013年11月17日 東北支援交流報告書

今回、パンラボの池田氏や NGBC などのグループら述べ20人弱の人数で東北・岩手陸前高田市に支援交流に参加した。すでに数回支援を行ってきているが、今回初のことで被災した現地の方が「語り部」となって、被災当時の話や現在の支援の動きについて「生の声」を聞かせていただきながら、陸前高田の各々の場所を回った。



(海に近かった、道の駅陸前高田を前にして。語り部さんと支援メンバー)



(中央・青い服の方が語り部の方。まだ生々しい被災の爪痕と復興のための重機が映る)

今回、初めて語り部さんの話を聞かせていただいて一番貴重だったのが現在、国の支援金や世界からの募金はどう活用されているか、そしてその使い道は住んでいる人にとって本当に有効に使われているか。被災した人ではないとわからない、「今」の問題を語っていただいた。数々話を聞かせていただいたが2つ印象に残ったのが、まずはお金の問題。

現在、津波の被害にあった地域は瓦礫などきれいに撤去されていて、更地のような状態にはなっていた。まずここにも問題があるおっしゃっていた。国は、一度方針を決めるとあとはそこにお金を落とすだけ。被災した人の本当にやってほしいことにお金はなかなか回らないという問題があるといい、瓦礫を撤去するのはいいが、まず人を先に動かす方にお金を回してほしかったとおっしゃっていた。たしかに、被災した2年9か月経った今も仮設住宅に住む人は多い。「瓦礫をなくす。津波の被害にあった地域を更地にする」これを第一にするのが国の方針なのである。

そして、その更地にした場所に人の住む予定はない。当たり前だが、いつまた地震が起きて津波が来るかわからないのに、被害のあった地域に住もうという人はいないだろう。なので、もともと住んでいた方たちで、陸前高田に残る方たちはみな高台の方に移動して、今は山を削って、更地にしている状態だ。そして誰も住む予定がない場所を津波から守るために、超大型防波堤を250億円をかけて作っている。高さ15メートル幅50メートルの防波堤を作る予定と聞き、私の頭のイメージではまるで要塞だなと感じた。もう一度言うが、この防波堤で守られる範囲に人が住む予定はないのだ。そこに250億円のお金が落ちているのが現状だ。語り部さんは言う「こんなとんでもなくでかい防波堤にとんでもない額の支援金を使うのではなく、高台に移動するのを円滑に進めるため、移動する人に一千万ずつ渡すのが良いんじゃないか。」と、おっしゃっていた。そして、この大きすぎる防波堤は住民からの反対もあるようだ。たしかに、3.11のような猛威の津波は来ることはない安心はあるかもしれないが、高さ15メートル幅50メートルの防波堤が出来れば、町から海が見えることはない。被災前は綺麗な白浜に松の林があった。観光客もたくさん来たという。住んでいる人間から見れば、前の姿を取り戻すとまでは行かなくとも、以前に近い海が見える陸前高田にしたいのが、本当の思うところである。

次に、語り部さんが語っていた問題が国と住民との「未来予想図」のズレである。上記の綺麗な陸前高田と巨大防波堤の問題がまさにこの問題なのだが、復興にかかる際、今後どのような街づくりにしていくか、国が有識者を招き復興の草案、復興の基盤となるものを考えた。普通の考えなら、まず有識者が考えたベースから、本当に住む人間の意見を聞き、最良を模索しながら復興にかかるのが第一と考えるであろう。しかし、いくら住人が声を上げようとも、住人の意見が採用されることはほとんどないと言っていた。国からすれば、せっかくの有識者の案だから、変更することはできない。といったところだろうか。

防波堤もそうだが、「奇跡の一本松」も1億円超をかけて、見栄えがするように枝の部分を樹脂製にした。仮設住宅にいまだに住んでいる人間がいるのに、だ。そして、これは住

民の中でも賛否両論ある問題なのだが、被災した傷跡を生々しく残す建物を撤去するか否か。いわゆる原爆ドームのように、無言で津波の恐ろしさを語るものとして被災した建物を残そうとする考えが住民から意見が出た。辛いことを思い出してしまうような建物を早く壊したい気持ちもわかるが、今後のために残すということもあって良いのではないかと語り部さんなどは思い、意見したが議論するまでもなく撤去された。津波に流されず傷跡だけ残した建物はだいたい市役所などの公共の建造物なので問答無用で撤去されたが、ただひとつ、私有の建物が残っている。建物の所有者は語り部さんと同じ考えをもっていて、それが理由で残している。お金の流れの問題と住民と行政の間の考えのズレ。これが今回の語り部さんの話で印象に残った。



(語り部さんは元ツアーコンダクターだったらしく、被災当時の話と共にこの写真のような、遠目では綺麗な陸前高田の街を見られる場所も紹介してくださった)

次に我々が向かったのは、いまだに仮設住宅があり、そこに住む住民の方との交流を図るため米崎小学校へ向かった。過去何度か交流したことがあるため、顔なじみもいたので最初から準備から円滑に進み、交流の一環のBBQが始まった。

今回、被災地にも物資はある程度あるため、陸前高田にあるものを消費しようということで、地元でとれた海産物を主にBBQすることとなった。



(地元で取れた、新鮮なホタテ)



(新鮮なカキをその場でボイルして食べるという、地元だからこそできる食べ方だ。調理して下さるのは、地元の漁師の方)

我々もこの新鮮な海産物をいただくのだが、とても美味しい。普段では食べられない食べ方も相まって、思わず次から次とおかわりしたくなった。

もちろん、我々も我々だからこそできる、パンを作らせていただいた。その場で練って

その場で焼いていただけるように、巻きパンにして BBQ を行った。



(パン生地を練る、地元の方たち)



(生地を棒に巻く作業をする、千葉県のパン職人と地元の小学生)



(パンを焼くこどもたち)

今回、この米崎小学校の交流のほか、地元のコミュニティセンターで、フライパンで焼くパンを作る講習や地元の主婦たちの集まりの「アップルガールズ」との講習や交流を行った。

そして、笑顔で再会の約束をして、この交流を終えた。次に我々が向かったのは、地元のりんご農園。現在、関東圏のパン屋さんなどで「リンゴの日」と称し、陸前高田で採れたリンゴを使ったパンや菓子類を作って売っている。そのほか、リンゴ農家から届いたリンゴジュースやそのままのリンゴを売るなどして、交流を図っているリンゴ農家だ。

この日も、リンゴ農園を見学させていただき、採れたての美味しいリンゴを食べさせていただいた。



(リンゴ農園を見学)



(赤々に色づく、陸前高田のりんご)

たくさんの品種があり、どれも個性があり、甘いだけではなく、実がしっかりしているが軽い食感のものや、洋ナシのようなしっとりとした食感のりんごもある。

翌日は、朝からリンゴの木の植樹を手伝わせていただいた。実るのはだいたい5年後だそう。5年後に立派なリンゴ出来て、このリンゴの樹は我々が植樹したんだと想像すると美味しいリンゴの味も倍に感じるであろう。未来の交流のための交流。今後、モノの支援とお金の支援だけではなく、多角的な支援が出来る。むしろお互い WIN-WIN の交流が出来る。明るい未来に向けて、共に進んでいけるようにする。そう感じた今回の東北支援交

流であった。



2013. 11. 18 澤島雄哉